

# 水の生活文化

## A Study of Livelihood Culture on the Water

梅原清子

Kiyoko UMEHARA

2004年10月13日受理

### はじめに

水は大気中に蒸発し雲となって降水する。水は壮大な循環体系をもち生態系を形成する。また、水は農業や工業、そして生活に利用され、使用後の水は河川等に流れこみ、再び人によって利用される。ここにも水の循環がある。循環するから、石油のように枯渇することなく、私たちの生活に繰り返し有効に利用することができる。とくに日本では降水量が多いため水に恵まれていると考えられてきた。「湯水のように使う」のたとえのように、水は空気と同じくあって当たり前、タダ同然とされてきた。しかし実際には、水利用の歴史はそんなに恵まれていたのであろうか。

この小論では、住まいに関わる水の使い方について検証する。水は、人びとの生命と生活にとって不可欠なものであり、人の営みの根源には、常に水の存在が関与している。わたしたちは水をいつくしんだり格闘したりしながら暮らしを営み、水の生活文化を創り出してきたことであろう。これまでの、人と水のつきあい方を明らかにすることは、生活のメカニズムを認識するとともに、現在のわたしたちの生活のあり方を見直すきっかけにもなると思われる。

水の文化についての研究は、生活にかかわるものだけでも全般的なフォークロア<sup>1)2)</sup>から、水道の歴史<sup>3)</sup>、台所<sup>4)5)6)</sup>、浴室・洗濯<sup>7)8)</sup>、便所<sup>9)</sup>などの変遷、国内外まで総合<sup>10)11)</sup>、エリアは多方面にわたって豊富である。また、水とならんで生活に不可欠なものとして火があるが、これとの関連性も注目される<sup>12)13)</sup>。これらの研究をもふまえ、水の生活文化について考察してみたい。ここで対象とするのは、主として日々の生活のなかで直接水に関わる、限られたプロセスであるが、「水は循環する」という性質上、現代の様々な水問題に波及することになる。また、住まいに関わる水について時代に沿う形で概観し、水の入手と使用について、さらに排水の段階を関連付けて検討しようとした。

### 1. 水の入手

太古より人は、水を求めて川の流れや湧き水のある地域に居を構えてきた。飲料や洗い物など生活に供す

るための用水（上水）は、ながらく、河川・湖沼・湧水・雨水などの自然水であった。必要に応じて水を汲んでは運ぶのが日々の仕事であった。必要な水を賄えない場合には、人びとは井戸を掘る技術、遠方の水源から用水路で運ぶ技術を開発した。水を手近に引き寄せ自由に使いこなせるよう、利便を図ってきた。

#### (1)井戸

井戸は、唐古や登呂などの弥生時代の遺跡から発掘され、また『古事記』や『日本書紀』に記されていることより、古くからの存在が知られている。

井は『広辞苑』によれば「泉または流水から用水を汲み取る所」であり、元来、水の集まることを意味している。泉も川も井と称したのである<sup>14)</sup>。これが後世には、地中を掘って地下水を汲み上げる人工的なものを井戸というようになった。水の出入口ということから戸を付けて井戸としたとも言われる<sup>15)</sup>。土砂の崩落をおさえるため弥生時代の遺跡からも、太い丸太をくりぬいたものや細い板を縦に打ち込んだものが井戸側として発見されている。関東ローム層の砂礫層で筒状に掘りにくいため、播鉢形に掘られ、人は螺旋状に底まで降りて水を汲むマイマイズ（カタツムリ）井戸もよく知られている。また井戸掘りの技術は大陸からの導入であり、空海・行基らの僧が仏教の諸国遍歴の布教活動とともにその技術を普及した。弘法大師（空海）が水に困る農民のため呪文を唱えて水を掘り当てるといふ、日本各地に残される弘法井戸の伝説がそれを示唆する。近世になると掘抜き井戸が上方で開発され次第に各地に普及し、井戸掘りの技術は著しく発展した。岩盤に小穴を掘削し深いところにある地下水脈から自噴させるもので、その後改良されて「上総掘り」の工法として全国に普及した<sup>16)</sup>。井戸は地下の地層を通過することで水がろ過され浄化されるので、通常、深い井戸ほど水質は向上する。

井戸替えは、年1回盆前に行なわれる井戸の掃除である。盆の時期にするのは、井戸が他界の出入り口と考えた時代の名残とされるが<sup>17)</sup>、水を汲み出しゴミをすくい井戸底を浚えて、水の清浄を保つために行われた大切な年中行事であった。

井戸の水を汲み上げる方法は、釣瓶が用いられた。桶に綱や竿を結び付け、水面まで投下して水を汲み上げるものである。これを地上まで引き上げるのに、テコの原理を応用したはね釣瓶や滑車を用いた車井戸が登場し、労力の軽減がはかられた。さらに江戸の消火器である竜吐水に改良を加えてつくられた家庭用の手押しポンプが登場した<sup>18)</sup>。これは明治末ごろには広く普及するようになったが、現在でも街角でその姿を見かけることがある。手押しポンプが屋内の流し場近くに設けられるばあいは「水道」に近づく。それを徹底させたのが電動ポンプであり、大正から昭和の初めに使用されはじめた。ついに蛇口の開閉により水が自由に使えるようになったのである。野外博物館「江戸東京たてもの園」に移築展示されている「田園調布の家」は、1925年に建てられた瀟洒な洋風住宅であるが、当時、郊外住宅地として分譲開始された地域ではまだガス・水道がなく、水は井戸を掘りポンプで汲み上げていたという<sup>19)</sup>。さてしだいに井戸は、水道の普及により主役の座を明け渡していくが、井戸水は水温が一定で夏は冷たく冬暖かく、とくに夏の井戸水は西瓜を冷やすなど冷蔵庫代わりにもなった。また水道料金より安価という特徴もあって、雑用水として重宝された。内閣府の水に関する世論調査<sup>20)</sup>によると1980年前後まだ全国で水道と併用する家庭が1割存在しているのはその証拠であろう。

## (2)水道

人工の水路を流れる水を用水(または上水)という。多くの遺跡にみるようにその多くはかんがい用で稲作の発展とともにある。生活用水としては、古代ローマの水道の遺跡はよく知られるが、国内でも古く平城京に水を引いた跡が発掘されている。1590年、徳川家康は江戸入国とともに小石川上水(のちの神田上水)を創設した。飲用を主とした公設水道の最初といわれている。1654年に完成した玉川上水とともに、上流に水源を求め開削した水路に導水され、江戸の市街地では地中埋設の石樋・木樋・土管などで巧みに配水された。町内のあちこちに設けられた榭(公共井戸)から釣瓶で汲み上げて使用されたから、水道とはいえ井戸と変わらぬ使い方であった。また、井戸端会議と称されるように、女たちは井戸の周りで洗い物をしながら、近隣のコミュニティ空間を形成していた。

これらの旧水道はやがて都市の人口増により上水の汚染が避けられなくなり、水漏れや汚水の浸入など清浄な飲料水を確保できなくなっていく。さらにコレラをはじめ疫病流行から衛生上の必要があった。コレラは幕末のころ日本で初めて発生したが、以後各地で猛威をふるい、とくに1877年には大流行し多数の犠牲者をだした。このような背景から、水道改良の機運が高まった<sup>21)22)</sup>。ろ過等の浄水処理を施し、鉄管等による有圧給水を行う近代水道が日本で布設されたのは、1887

年(明治20年)、横浜が最初である。ついで、函館、長崎、大阪、広島、東京、神戸などの都市に拡大された。しかし技術面、費用面など容易ではなく、「道路・橋梁及び河川ハ本ナリ、水道・家屋・下水ハ末ナリ」(東京市区改正草案)という都市基盤整備の思想もあった。そのため明治末の計画給水人口の比率は8%にすぎず、戦後の1950年になっても全国で26%とその普及は遅々としていた。住民の加入を増やすためには衛生観念の発達やそれに関連する女子教育の進歩を待たねばならなかった<sup>23)</sup>。しかしその後とくに戦後は急速な伸張をとげ1988年には90%を超えた(2002年;96%)。近代水道は誕生から百年を経て「国民皆水道」に近づいた<sup>24)</sup>。なお、ここでいう水道とは普通、上水道、簡易水道、専用水道の3種を指し、水道法適用外の飲料水供給施設を含む場合もある。

## (3)給水/水を住まいに持ち込む

以上、水源と取水方法の両面からみたが、川や湧水など水場に人が出向いて作業をするものを除くと、給水方法つまり、水運び・水溜めのやり方の別は様々である。

まず、各戸給水の蛇口を開閉する(電動ポンプを含む)ものは、最も進化した形で、今日の日本ではごく一般化したタイプである。次に、共用水栓が、水道事業の草創期によくみられた。数戸が共同で一つの水道を引き負担軽減をはかったのである。汲み上げは不要だが各戸の水運びや水溜めの労は変わらない。また、竹筒をつないだ筧によって、湧水など水源から引き水をするものもあった。水を手元まで引き寄せる工夫である。上層住宅の中には土間に内井戸をもつものも現れるが、これは例外的である。最後に、井戸や流れから水を汲み上げ、水使い場まで運搬するもので、この最も難儀な給水方法は、しかしながら数十年前まで普通の姿であった。

縄文時代の竪穴住居には炉跡はあっても流しの跡は見られない。昔の民家でもイロリやカマドの堂々とした設えは注目されるが、流しは影が薄い。炊事以外にも暖房・照明・乾燥など多目的の火とは異なり、少量の飲用水のほかは、「洗う」ためだけの水は、住居内に置かれねばならない理由はなかったということであろう。また、戦後の混乱期、都市の小規模住戸など、台所がない場合が珍しくはなかった。このような場合、居室にコンロを(無理やり)持ち込むが、流しは他世帯と共同で使用となる例も多かった<sup>25)</sup>はずである。流しは、もともと台所の脇役であったといえる。

## (4)水の容器

かつての暮らしでは、屋外や屋敷外の離れた水源から人力で運んで水を溜めるのが殆どであった。そのため不可欠な「水の容器」について振り返ってみよう。

土陶器製のかめは縄文時代から大型のものが出現しているが、日本では運搬用や保存用は少なく、専ら貯

水用に供されたようである。大振りの水がめが流しの脇に鎮座し、運びこまれた水が溜められた。そこから水は必要な分だけ柄杓で汲み取って使われた。異物を避けて木の蓋があった。かめは地方によっては、木をくりぬいたフネに替わることもある。いったん水を汲み置くのは、浄化の意味もあった。川水、井戸水には砂やゴミが混入していることもあったから、沈殿させる必要があったのである<sup>26)</sup>。少し飛ぶが、手押しポンプの口に砂漉し用のさらし袋が捲きつけられていたのを思い出す人もあろう。

水の汲み取りや運搬の具として主体となるのは、木製の桶類である。木や竹でできた住まいの中で、使われる道具類も木製のものが多かった。桶は板を円筒形に並べて竹（または金属）のたがをはめたもので、「結い桶」と称して室町時代から存在したといわれる。因みにそれ以前は、薄板を円形に曲げて底をつけた「曲げ物」であった。曲げ物は、今も柄杓や弁当容器などに使われることはあるが、大量の水を入れて運搬するには不向きである。その点、桶類の出現は大きな意味があった。紐を結わえ付け天秤棒で担ぐこともされ(担い桶)、これをタゴと呼ぶ地域もあった<sup>27)</sup>。桶は運搬以外に、食器・野菜などをあらう洗い桶、洗濯用のたらい、洗面用の手水桶、取っ手のある手桶、風呂桶、飯櫃、半切桶、漬物桶、肥桶、特殊なものでは棺桶など多種存在し、生活の具としてまた農業用として多岐に使われた。明治初年の桶類生産状況を見ると、手桶やたらいが多く、風呂桶は少なかったという<sup>28)</sup>。なお製法のよく似た樽は、桶に蓋をつけたもので、酒・醤油などを保存・移動用に用いられる。

バケツは、英語のbucketからきており当初は輸入であったが、明治中期に国産され始めると、それまで使われていた木製の手桶を駆逐した<sup>29)</sup>。鋼板の薄板で成形されたバケツは、桶に比べて軽くて持ち運びしやすく、戦争中の防火演習のバケツ・リレーでも活躍した。水運び以外に、雑巾かけ、食品入れ、何でも入れられる多用途な家庭の必需品である。しかしこれもさらなる改良が加わり、「より軽い、錆びない、音のしない」プラスチック製が登場する。石油化学時代の幕開けは、1955年通産省の石油化学工業育成計画からである。各地で石油コンビナートが誕生し、この石油精製の過程で生み出されたプラスチックは、生活全般にわたってまたたくまに根付き、生活を変えていったモノの一つである。「プラスチック製のバケツがほしい」と一読者が提案したのは雑誌『暮しの手帖』38号まさに1957年のことである。

桶やバケツは、その材質をプラスチック類に変換しながら残ってはいるが、もはや以前のように頻繁に使われることはない。例えば、流しに洗い桶をおいて食器をつけ洗う家庭は今日おそらく少数派となっている(食材の変化も関係するが)。水は流しながら使え

るようになったし、水道用ホース(と有圧水)の出現が大量の水をわけなく運べるようにしたからである。

## 2. 水の使用—水まわり

住まいのなかで台所、浴室など水を使う空間、つまり水廻りについて、以下みてみよう。

### (1)流し

前述のように、かつての水仕事は川や泉に出かけて行うものであり、水源から汲んで住居まで桶で運ぶのは飲用水ぐらいであった。

住居内の流しに類する設備として、古く絵巻物類によると、女が台上で鉢を洗う様子や、仏に供える水や花を用意するための縁先の闕伽棚(『信貴山縁起絵巻』12世紀後期と推定)、曲げ物の水桶の載った竹簧の子の台のある寺の台所や一部に簧の子が張られた床(『慕帰絵詞』14世紀中期)などに近縁がみられる。もっともこれらは豪族や寺の設備であって、一般の人びとの住まいの様子はよくわからない。板敷きの床に置かれた大まないたで肉を刻む猟師の図(『粉河寺縁起』12世紀後期)からすると、流しの類いはなかったことも考えられる。

水が住居内に運び込まれるようになると流しが発達する。流しには立ち流しと座り流しがある。大正期までは、床上で使われる場合は膝をついて使う座り流しが多かった。もともと日本人の座る様式は住居全体にわたるものであった。日常の起居、食事だけでなく薫仕事など殆んど座っておこなわれた。それがなぜ座り流しが床上で立ち上がったのか、山口は、西洋流の立式生活様式の啓蒙とともに、手押しポンプの普及つまり都市化による水のかたちの変化によって立式流しが成立した<sup>30)</sup>、と説明する。

戦後の生活雑誌を代表する『暮しの手帖』は、1954年から十年近くにわたって台所計画の特集を組み、様々な側面から網羅的に点検した。家事作業の分析をもとに、流しをテーマとする27号(54年)では、代表的な材料別に特徴、価格、使い方を概括している。それによると、「もう都会では殆ど見当たらない」木製の流しについては、腐りやすく、また乾燥しすぎると隙間があいて水が漏る、としている。隙間があっては水を流すには不都合だし、衛生的にも好ましくはなかったが、桶の感覚で昔は流しといえば殆ど木製だったのである。鉄板(ブリキ)張りは当時多用されたが安い代わり錆びやすいこと、人造石研出しは既製品として市販され、その売れ行きは飛ぶ様、とある。そのほかタイル貼り、陶製、銅版張り、アルミニウム張り、等多種の記載がある。いずれも木製の欠点を補って水を流しやすいよう配慮されたものである。さらに不銹鋼(ステンレス)張りについては、高価ではあるが流し材として最も欠点が少なく優れたものと評価している。「不銹鋼」の表記にも年代を感じさせられるが、案

に違わず今日ではステンレス全盛となった。1956年公団住宅の目玉商品として、継ぎ目のないプレス加工のステンレス流しが採用されたことが起爆力となった、といわれている。このように、戦後50年の間に種々の材料の流しが伝えられ用いられ、そして淘汰されてステンレスに収斂した、といえよう。

いっぽう、農村の台所流しは、戦後GHQが推進した生活改良普及事業が直接の契機となって、大きく変貌していった。まず煙突のある改良竈の導入によって台所が煙らなくなると、次にはその黒く煤けていたところにタイルが貼られ白く明るい台所が出現した。タイル貼り台所、タイル貼り流しについては、戦後農村の台所改善の象徴的存在なのであった<sup>31)</sup>。この台所改善はさらに1955年頃から「台所はよくなったが、水槽に水を汲んで入れるのは楽でないとの声が高まり」山水を引く、電動ポンプを付けるなど給水のための工夫改善が重ねられた。それは地域の女性たちが協同した簡易水道の設置運動に発展して、農山村では簡易水道ブームが起こり、1964年からの農水省の融資制度も誘引となって、簡易水道の普及が徹底していった<sup>32)</sup>。

今日、日本の水道普及率は96%に達したが、その水質については後述する環境汚染だけでなく水道管の鉛害や集合住宅における受水槽の汚れなどさまざまな問題を抱えている。消費者の飲み水に対する意識の高まりから近年急速に進んだのが家庭用浄水器の設置である。市販されるタイプは概して活性炭と中空糸膜によってカルキ臭やサビ、カビ、有機物などの吸着除去をおこなうものだが、カートリッジ交換も必須であり、型やろ過方式については製品開発が試行錯誤されているように万全の性能をもつものではない。浄水器が商品化されだしたのは1960年代塩素投入量が増え、「まずい水」が評判になり始めてからで、2001年現在の使用状況は、29%の人が浄水器を使っており、以前使っていた、も加えると4割が設置している。また大都市ほど使っている人が多く、東京都では48%となっている<sup>33)</sup>。すなわちわが国の水道水をそのまま生で飲むことに不信感を抱く人が多く、そしてとりあえず安心な水を得ようとする人が増加していると考えられる。ペットボトル入りミネラルウォーターの消費量が増大するのも、いわゆる名水汲みのドライバーの出没も、おいしい水・安心な水を求める個別の対応の表れであろう。

## (2)風呂

風呂と湯は、今日では殆んど区別なしに使われているが、本来は発生系統を異にしており、前者は蒸気浴を、後者は温水浴を意味する。柳田国男によると、風呂は室(ムロ)に通じ穴ぐらや岩屋を意味するが、この密閉的空間に入り熱気や蒸気により発汗や垢をとり新陳代謝を促す、要するにサウナである。これが風呂の由来のようで、京都八瀬の竈風呂などはその例であ

る。つぎに両者の折衷式となるのが半湯半蒸気浴であり、他所から浴槽に湯を運び入れ、下半身を湯に浸しながら立ち上る蒸気で全身を温めるものである。水とエネルギーの節約タイプということになり、戸棚風呂、江戸の銭湯にみられた石榴風呂、浴槽に入って頭上に蓋を被せるフゴ風呂、などがある。風呂に対し湯は、今日の家庭の風呂や銭湯と同じく温水に身をひたす手法で、近世後期から普及したとみられている。上方では五右衛門風呂、江戸で鉄砲風呂が多かったが、いずれも大型の桶や釜を備え付けることから、据え風呂と呼ばれた。

ところで風呂は仏教と密な関係をもっている。仏教は、経文に洗淨や病の除去など沐浴の功德を説き、浴室を七堂伽藍の一つとしていた。国家宗教として不動の地位を占めるに従い、光明皇后伝説にあるように寺院の浴室では施浴が熱心におこなわれた。また各地で温泉を発見し仏を祭って衆生に開放した。寺院の浴室と温泉は相補完しあって、沐浴の功德を一般に普及させるための布教手段として大いに利用された<sup>34)</sup>。こうして仏教は日本人に沐浴愛好の習慣を植え付ける主要因となったのである。現代の銭湯の玄関外観に唐破風の建築様式を残す例が見かけられるのも、寺院との古のつながりを示すものと考えられる<sup>35)</sup>。

寺院の施浴を営業用にアレンジしたのが銭湯である。中世から近世にかけ、人口の増加や都市の発展とともに、施浴に替わり、気楽で利用しやすい銭湯が都市地域で繁盛した。現代に至るまで、銭湯は根強い人気を持ち、スーパー銭湯のように経営者の生き残りをかけた各種の試みも功を奏し、自家風呂にはない開放感や慰安を求めて銭湯通いをする人びとも少なくない。しかし今日一般には、自家風呂の普及によって銭湯廃業が顕著である。東京都を例にすると、1968年の2687軒をピークに2003年には4割の1117軒までに落ち込んでいる<sup>36)</sup>。

いっぽう農村地域の風呂については、名主などの上層住宅においては接客用に湯殿を設けるなど近世からその設備がみられたが、一般民家に普及するのは明治以降である<sup>37)</sup>。自家風呂をもつことは、風呂桶の設置、燃料や水の確保などが大きな負担となる。たとえば、水の汲み上げ・浴槽までの運搬は殆ど子どもや女性の仕事だったが、その労苦は並大抵ではなかった。このような事情から、各種の入浴習慣がつくられ、少量の湯で入浴する方法や、湯を反復して沸かす留め湯の習慣によって、労力と費用の節約が図られた。また農山漁村のもらい風呂もその一つである。どこかの家が風呂を焚くと、家族が入るとともに近隣に声をかけ入浴に招いた。少ない湯量で、多人数が身体を洗う、このような使い方では、湯の表面に垢が層をなして浮かんだというもうなずける。残り湯は、し尿と混ぜ合せて田畑の肥料として活用されたのである。

入浴よりもっと簡便に行水という形で、たらいに水または湯を汲んで汗を洗い流すこともあった。行水は、もとをたどれば神仏参拝のとき境内近くの清流での「潔斎浴」であり<sup>38)</sup>、洗い清める「行」からきている。中世以降は、個人の庭先などに大きなたらいをおいて夏季の夕暮れなど湯浴み・水浴みすることをいうようになった。おそらく「取り湯式」の風呂の起源であり、やがて固定され「据え風呂」へと発展した、とみることもできよう。いっぽう、その簡便さから行水は近代まで続けられていた。明治のころまで東京の下町では行水用の湯を売り歩く商売もあったという<sup>39)</sup>。現代でも、日向水を利用した子ども用のビニールプールなどはそのなごりといえよう。またたらいではなく浴室シャワーによって、随時行水することに変化したのである。

一般住宅に現在のようなハンドシャワーが普及し始めたのは1960年代からである。今日では浴室設備としてシャワーの有無は、若年単身者たちの間では住宅選択条件の一つとなっている。学生マンションなどで、とくに夏季、シャワー浴のみで済ます場合が多いことを見聞する。光熱水道代の節約の意図もあろう。ヨーロッパでシャワーが用いられたのは、主に医療的手段からだったとされる。すなわち足、顔面、腰などへの水圧の治療的効果が期待され、公的な場でも刑務所の囚人、兵舎で兵隊に強烈な水圧でシャワーを行い、清潔を維持し、あるいは士気を高めようとした<sup>40)</sup>。また、洗面・トイレ・浴槽がセットになったおなじみのホテルタイプのユニットバスは、日本人には必ずしも好評ではないが、シャワー浴が基本である。ヨーロッパの比較的簡易なホテルではしばしば、電話ボックスのごときシャワールームのみ付設される。ドイツなどでは一般的な住まいにあっても、バスタブなしが半数を占めるということである。これには、日本のような高温多湿でないこと、冬季の室内暖房の完備、など気候や居住条件の違いが関与しているのは明らかである。

現在の日本では自家風呂があるのはごく普通のことになっている。総務庁の住宅・土地統計調査（1998年）によって浴室保有率をみると、浴室のある住宅は全国平均で96%となっており、とくに建築時期が1980年代以降の住宅ではほぼ100%に近い。しかし小規模かつ古いものが多い木造民営借家になると87%とやや低く、また時系列をたどると73年の同調査ではまだ保有率は73%である。すなわち少し前までは風呂のない住宅はさほどめずらしいものではなく、公営住宅では浴槽を標準装備しなかったことでもわかるように、専用の浴室を設けることは贅沢だと考えられていた傾向もあった。そういえば、浴室スペースを潰して物置に改造した都市の狭小住宅の例もあった。入浴は銭湯にいけばよいが、増え続ける物の収納場はない、ということであろう<sup>41)</sup>。しかし1950年代のおわり、日本住宅公団

が戸別浴室を装備したことは画期的であり、これらがモデルとなってしだいに浴室が一般化されたのである<sup>42)</sup>。そしてこれは、まさしく銭湯の衰退と重なっている。

たっぷりのお湯に浸かって心身をリラックスする良さは格別である。最新のモデル住宅などで多機能でゴージャスな浴室がウリになることもしばしばである。しかし、そのような日本人の暮らしの文化は、そう古くから根付いていたわけでもない。また今後その入浴習慣が維持されるとも断言できないという気がする。

### (3)洗濯

初期の洗濯は風呂と同じく信仰と一体であり、古代人は沐浴し衣類を清浄にして宗教行事に参加した<sup>43)</sup>。洗濯伝承としては、すでに『古事記』に記録があるが、川辺や湧き水がその場であり、ここは寄合い場であり一種のレクリエーションの場であった<sup>44)</sup>。平安時代の扇面古写経などに洗いものをする女性たちがよく描かれているが、井戸端で洗うようになり、たらいが出現して、それまでの叩き洗い・足ふみ洗いからしゃがみこんで手揉み洗いをするようになった。これには布の繊維が柔らかいものに変ったことも関係する<sup>45)</sup>。洗浄剤としては、サイカチの煎じ汁、灰汁や米のとぎ汁などが用いられた。石鹼は16世紀に伝来したといわれるが、一般に利用されるようになったのは明治初期以降のことである。

洗濯作業は、機械化と外注化が進行したことで家事労働の省力化の最右翼に位置する。結果、清潔な衣生活が得られるようになった。最近では、衣服は汚れたら洗濯するのではなく、脱いだら洗濯するという生活習慣に変化したとまでいわれている。電気洗濯機は大正期にアメリカから輸入したのが最初で、1930年には米企業からの技術導入により東京電気（のちの東芝）が国産第1号を送り出した。この時の価格は、当時のサラリーマン初任給の5倍以上ということからも分かるように、一般家庭には縁遠く、1940年までに5000台製作したにとどまった<sup>46)</sup>。その後53年頃には電気洗濯機の製造販売が始まり、テレビ、冷蔵庫とともに「3種の神器」として、家庭電化の波に乗って一大ブームとなっていく。家電メーカーのキャッチ・コピーが「奥様の洗濯量は1年に象1頭丸洗い！」だったことは、よく知られている。「洗濯機で洗うのは家事の手抜き」と言われかねない時代ではあったが、たらいと洗濯板で、しゃがみこんで洗う重労働から女性を解放し、便利至極なものと高く評価された。『暮らしの手帖』35号（56年）は「私たちの暮らしに、いわば革命的变化をもたらしつつあることは、どうやら疑う余地はない」として、家電製品のなかでは一番役に立つので「まず電気センタク機をお買いなさい」と手放しの賛辞をおくっている。さらに同誌はその後、2槽式、自動給排水式など新

機種が発売される度に電気洗濯機の商品テストを繰り返して、濃密な取り扱いの誌面を作ってきた<sup>47)</sup>。また、住まいの中で電気洗濯機の置き場がなく、感電を気にしながら浴室に置いたり、ベランダ、玄関先に設置する家庭も多かった。それぐらい、電気洗濯機の普及は顕著かつ急激であったといえる。因みに普及率は、57年20%が65年には50%、70年には90%を越え、75年ころからはほぼ100%の線を維持となっている(消費動向調査、経済企画庁)。

ところで電気洗濯機の普及は、合成洗剤の伸長の決定的な要因となった。合成洗剤は51年にはすでに家庭用として発売されていたが、当初はまだ割高であった。因みに粉石鹼は、洗濯業者向けに大正ころより需要があった。いっぽう、戦中からの統制時代を脱した石鹼産業は、洗濯石鹼・粉末石鹼の需要増加で1960年には生産量はピークとなる。しかしその後は合成洗剤への移行が顕著となり、石鹼の国内消費量は年間20万tのペースで推移するにとどまる。対して合成洗剤の方は、急増し現在では100万tを越えている<sup>48)</sup>。この動植物油脂を原料とした石鹼から石油系合成洗剤に移行したのは、石油化学の急激な発展のもと、主要原料のアルキルベンゼンや助剤(ビルダー)の国産化による合成洗剤のコストダウンが実現したこと<sup>49)</sup>や、マスコミを通じた洗剤企業のPR作戦の効果が大きい、石鹼に比べ、冷水に溶けやすく、黄ばみ・石鹼カスもなく洗浄性能に優れる、とみなされたことから電気洗濯機に専ら用いられるようになった。

合成洗剤時代を迎え洗濯用洗剤だけでなく、56年には台所用、60年に住居用、また55年にシャンプーと各種の合成洗剤が競って発売された。台所用洗剤は、食器洗いのみならず食品にも使用された。『暮らしの手帖』38号(56年)には、「回虫の卵を落とすソープレスソーブ」の記事がある。国立衛生研究所の試験データをもとにしたもので、水で洗うよりよく落ちる、大腸菌も落ち、残留成分の毒性はなし、と合成洗剤に軍配をあげる。考えてみれば界面活性剤の作用で汚れが落ちやすいのは当然なのだが、発売当時「魔法の一滴」のように感じられ、泡の浮く水中で果物など洗った記憶が著者にもある。

ところが、現実には合成洗剤が急成長するや、洗剤の公害問題が注目を浴びた<sup>50)51)</sup>。まず62年人体有害説が浮上し、肌荒れ、催奇形性などの悪影響が指摘された。これに対し厚生省等政府は「通常の濃度と方法で使うなら食品衛生上の危険はない」と結論付けた。しかしこの公式見解を疑問視する意見は根強く、両者は今日まで平行線を辿っている。少なくとも今では生野菜を洗剤で洗う人はいない(と思う)。また直接の毒性問題に続いて、合成洗剤成分による水質汚濁問題、「泡公害」「富栄養化」が起きた。合成洗剤は家庭で多量に使用される化学物質であり、排水として河川に流出さ

れる。日本の河川は急流で流達時間が一般的に短いことから、界面活性剤は河川中で分解されず海域へ流出しやすい。したがって河川や海の水生生物へのリスクなど、生態系への影響もまた懸念される。疑わしい物質であるには違いない。

一般に水質汚濁とは「清澄な水に異物が混入して酸素を消費したり水生生物に影響を与えたりして、水のもつ本来の性状が変化すること」<sup>52)</sup>であるから、工場排水や農業排水に加え、生活排水による割合が高く、深刻化している。われわれが生活するかぎり避けられぬもの、といえるが、家庭から排出される水質汚濁物質は洗濯排水のみならず、流しや風呂で使用された洗剤、シャンプー、石鹼などの洗浄排水、皮脂・垢、食べ残しの調味料、種々の有機溶剤、など有機物系から化学物質まで広範で多種多様である。これらは身近な溝や川に垂れ流されることも多い。下水道や浄化槽の施設設備のない、あっても不十分な排水処理しかなされない場合は、河川や湖沼、さらには地下水を汚すことが不可避である。

#### (4)便所

古来より便所のことをカワヤ(川屋)と称したのは、川に架けた杭の上で用を足し、排泄物を流してしまう方式から来ているとされる。また、平安時代に画かれた『餓鬼草子』には路傍で排泄する人びとの様子が描かれている。このように固定した便所のない住まいが一般的だったのである。汲み取りの便所が登場するのは14世紀半ばのこと、農業技術の進歩により、人糞尿を下肥として活用するため貯留するようになったからである。以後、人糞尿の利用は農民にとって重要な営みとなった。農家の便所は、庭先の日当たりがよく熟成しやすいことが優先され、汲み取りやすいよう2枚の板を渡しただけの便槽になっている。肥料として即効性のある小便には、別に住まいの出入り口付近に桶が設けられることが多い。このような便所は、農家では最近まで残され利用された。なかには風呂や流しの排水が流れ込むようになって、肥料として活用するよう奨励されたことから、江戸時代の農書などでも、繰り返し便所のつくり方が具体的に指示されている<sup>53)</sup>。さらに自家分だけでなく都市住民の糞尿も貴重な肥料であった。都市の人糞尿は、収穫野菜と交換されるなどして近郊の農民の手によって農地に還元された。このシステムのおかげで、幕末に来日した外国人が日本の街路の清潔さに驚いたという。当時のパリやロンドンでは道路は汚物やゴミがあふれ、こうした不衛生が伝染病を蔓延させ、下水道がつけられても流れ込む川が汚れ放題という状況であった。

日本の農業で使われた人糞尿は、すぐれた天然の肥料で土壌を肥えさせ作物には具合のいいものであったが、問題もいくつかあった。その一つは寄生虫の卵である。人間の腸内に寄生する回虫や十二指腸虫などの

卵が、大便にまじって畑にまかれ、野菜に付着して寄生虫感染が広がるという経路があって、罹患すると体力低下や余病の深刻な被害をもたらす「国民病」となっていた。1931年「寄生虫予防法」が成立して、学校保健事業のほか、寄生虫卵を完全に死滅させながら施肥資源がえられるような構造の改良便槽の研究がおこなわれた。関連して水洗便所や污水处理に関する研究も着手された<sup>54)</sup>。しかし都市化の進展や人造肥料の出回りにより、しだいに糞尿も有価物としての性格を失ってきた。長らく続いたこのある意味優れた人糞尿のリサイクル・システムは、高度成長期以降ほぼ消滅した。衛生観念の浸透とともに、農家は化学肥料と農薬の大量使用によって収穫を維持増大し、消費者もまた寄生虫の心配のない見た目のいい農作物を歓迎したのである。

水洗便所の原初は、前述の川屋であり、これに近いものは山岳地帯などでは近現代まで存在した。和歌山県高野山もその一つであるが、ここではかつての深山も町になり参詣者・観光客で大賑わいとなると大量の糞尿を流水で流し去ることはできなくなり、下流の有田川まで水質汚染が問題となった。このような経緯から、高野町では浄化装置を設けて近代的な下水道の整備が戦前から先進的におこなわれた<sup>55)56)</sup>。

水洗式には下水道、コミュニティプラント、浄化槽の3種類がある。それぞれ、public、community、individual、に対応するものといえる。これらは所管が国交省、農水省、環境省などに分かれ複雑であるが、基本的には対象地域の人口密度などの条件によって選択されるものである。

2000年実績では水洗化人口83%、このうち下水道人口が56%、残る27%が浄化槽やコミュプラとなる（環境省廃棄物・リサイクル対策部調べ）。浄化槽の始まりについては、水洗便所が輸入されホテルや銀行に使用された頃に遡る。1896年竣工の東京の日銀では水洗式が採用されたが、浄化設備がないので汚水は川岸までパイプで送り、そこから汲み取り船が汲み取ったとある。水洗式になると流した水が加わるので当然排水量がふえ、そのため汲み取りが困難になる。そこで法律が改正され、地方長官の許可する「汚物処理槽」を設けたものはその処理水の放流を可能にしたのである<sup>57)</sup>。本格的な汚物処理槽を備えた住宅は1914年が最初といわれる<sup>58)</sup>。

今日の浄化槽は個人が設置するものであるが、問題は、合併処理浄化槽ではなく単独処理浄化槽の使用が圧倒的かつ長期に続いた（2000年時点でも水洗化人口の22%を占める）ことだ。後者は污水处理能力に劣るうえ、便所からの排水以外の生活雑排水つまり台所、風呂場、洗濯場からの排水に関しては、処理されないまま河川に放流される。1人1日当たりの生活排水中の有機物質（BOD）43gとして発生割合をみると、台所

関連が40%、風呂21%、洗濯9%（平成11年版環境白書）であるから、これら生活雑排水はトイレ汚水の30%をはるかに上回る。したがって生活由来の汚濁負荷を解消するためには、合併式が格段に優れるのは自明である。なお遅きに失しているが、単独処理浄化槽は2001年4月以降の新設が禁止された。

用便後の手洗いについて付け加えると、以前は便所のそばの縁先におかれた手水鉢を使った。メンタルな意味は別として、あまり洗浄の役には立ちそうにない。明治末から衛生手洗い器と称する、下端を押し上げると一定の水が出て容器の水が空になると補充するしくみの器具も現れ、60年ごろまで馴染みのものであった<sup>59)</sup>。しかしいずれにせよ便所まで水栓がつくことはまれで、いわんや水洗トイレは、一般の人びとにとっては別世界のものであった。

排泄物をレバーひと押しで流し去る生活、その快適さを今や国民の8割が享受できようになり、汲み取り便所を知らない世代も生じているが、忘れてはならない課題がある。言うまでもないが、水洗化は大量の水を消費するということである。家庭用水のうち水洗トイレの使用割合は後述のように無視できないものである（東京都水道局調べ1997年）。あるいは阪神淡路大震災で露呈したように災害時、断水時の盲点となることも考慮すべきである。つまり今後の水洗トイレについては、緻密な設備設計および節水管理が不可欠となる。

## 総括

以上、住まいの水まわりの起源や発展過程を概観してきた。そこには明らかな水の使い方の変化、水と人びとの暮らしとの関わり方の変容がみられた。

まず、水の使用量が増大してきたことは衆目の一致するところである。社会統計的にみるならば、生活用水の1人1日当たり使用量は、322リットル（2000年）である。近年横ばいとはいうものの、1965～2000年の変化をみると約2倍に増加している（国土交通省水資源部調べ）。都市化や経済活動の拡大、そして生活様式の変化を如実に物語る。生活用水のなかでも家庭における使い方をみてみよう。家庭用水の使用量を試算すると、ためすすぎの食器洗いは20ℓ、家庭用風呂桶に入れる水は180ℓ、全自動洗濯機で1サイクル105ℓ、水洗トイレで大レバー6回90ℓなどである<sup>60)</sup>。使用割合でみれば、最も多いのは風呂の26%、次いでトイレ24%、残りは炊事22%、洗濯20%、その他8%となっている（東京都水道局調べ1997年）。つまり、生活水準の向上に伴い飲料用以外の雑用水が大半を占める。にもかかわらず、飲用にできるきれいな水が区別することなく使われている。大量の水道水を無造作に使い続けているのがわれわれの生活なのである。

もっとも節水意識はそう低いわけではない。内閣府

「水に関する世論調査」(2001年)によると、とくに水の使い方に対する意識では、「節水している」と答える人が65%と「豊富に使っている」人の2倍以上を占めている。節水の理由は、「水は限られた資源で大切にしなければならないから(もったいない)」が78%で「たくさん使うと家計にひびくから」の43%より多い。「使えばそれだけ川や海を汚すことになるから」の23%もあり、環境への意識が家計への配慮より優勢といえる。節水を心がけている面としては、風呂を61%、洗濯を50%があげているが、具体的な内容として考えられるのは、残り湯の再利用、洗濯はまとめ洗いをする、などであろうか。

ここで水の節約を図る一方法として、風呂の残り湯の洗濯利用についての有効性を検討してみよう。自家風呂をもつ主婦283人に対するアンケート<sup>61)</sup>(93年9月和歌山市内調査実施)結果による。残り湯の洗濯利用は「よくする」34%、「たまにする」25%、「しない」40%となっていた。洗濯に利用する人は、「水が貴重だから」「水道代の節約」「石けんがとけやすい」など、逆に利用しない人は「運べない」「残り湯は汚れている」などが理由である。運べないのは、浴室と洗濯機の位置が遠く離れている、風呂用ポンプがないためバケツで運ぼうとする、などのせいであろう。これらをもとに残り湯利用の条件として考えられる事は、浴室と洗濯場の近接した間取りプランとすること、洗濯時刻まで残り湯を保持しておける浴室設備たとえば湿気対策として窓・換気扇を設けること、残り湯浄化装置の設置(ただし通常の入浴方法では汚れの程度は寡少なため必要度は低い)、洗濯機のタイプとして全自動式は不向きであること、などであろう。また残り湯の利用は、環境意識が高い人に多いこともあきらかな結果となっているので、啓発活動も無視できないであろう。水質汚濁の原因が工場廃水から家庭排水にウェイトが移ってきて、それを意識しないばかりか過剰なほどの清潔にとらわれ、水の使い捨て感覚を助長してきた状況もあることを考えればなおさらである。

現在、水は流れるもの、となっている。もちろん物理的には今も昔も流体であるが、生活システムのいえば、昔の水は運ぶもの・溜めるものであった。運ぶ水は無駄を許されない。調理を例にすれば、洗い物や大まかな準備は屋外の水場でおこない、床上座り流しや木製の流しでは最低の仕上げの調理をするだけであったから、そこで使われる水の量は限られたもので済ませたのであった。もちろん使用後の排水も制限される。米の研ぎ水は溜めて庭木に撒き、箱膳時代には茶碗はお湯ですすいで吞んでしまいさえた。対して水道以降、水のほとぼしる蛇口の下で野菜や魚を洗いながら調理し、食器を洗うようになったのである。同様に、水道と洗濯機は大量の洗濯物を楽々とかつ頻繁

に、水洗トイレはレバーひと押しで排泄物を流し去り清潔に、そういう快適な暮らしが実現された。水が運ぶものから流れるものになったとき、生活の変化はまさに革命的であった。

生活場面でのこのような水使用の変化を促進したのは、以下のような背景があったからと推論される。

・各種の水の具、水にかかわる施設設備の発展。なんといっても水道という都市施設が大きい。また年代的には遅れるが下水道も同様である。補助的な具として水道用ホースの出現もある。これとは逆に、桶に代表される水を運び洗うための容器は衰退の運命にある。

・利便性の追求。上水道や洗濯機の普及は、とくに水汲みや洗濯労働にたずさわる女性の生活のあり方と意識を変え家事の合理化は著しい進展をみた。しかし利便性の追求は、いっぼうで環境への配慮を置き去りにしてしまいやすい。

・衛生観念の浸透。水が社会から注目されるようになった最初は、伝染病の流行で、日本では寄生虫の問題もあった。これらは上下水道の普及で改善されたが、経済の高度成長期以降、都市では水源の汚染が進み水道への信頼が揺らいでいる。

さて、地下水や表流水に恵まれない離島の暮らしでは、雨水利用が根付いている。降雨をタンクに貯留し、自然の恵みを水資源としてそのまま飲用することも多い<sup>62)</sup>。今日では、さらに積極的にこの雨水を利用する動きが顕在化している。一般には雨降りは歓迎されないことが多い。場合によっては悲惨な災害をもたらす恐れもある。農家や庭木を育てている人にとっては、慈雨という言葉は生きているが、都会ではとくに、雨というのは排除すべき存在になってしまい、降った雨も速やかに下水道で排除される。雨水利用運動に長らく関わってきた村瀬誠は「例えば、東京の人の考え方は、足元に降る雨は迷惑だけれど、水源地である群馬には降ってほしいというものでしょう。」と述べ、発想の転換を提案してその手立てが雨水利用であるとする<sup>63)</sup>。1982年、墨田区の両国国技館は巨大な屋根に降る雨水を利用して先鞭をつけたが、最近では雨水利用の導入は官民施設を問わず広く普及しつつある<sup>64)</sup>。これは、コンクリート・ジャングルによる不浸透域率が増大し都市型洪水を引き起こしているが、その防止にも威力がある。貯めた雨水は、トイレ、洗車、撒き水などの雑用水として利用するほか、災害時に備える地下貯水槽の水源にもなり、雨水利用にとりくむ住民主体のまちづくりに至るまで、まさに一石三鳥、四鳥とその効果は拡大する。もちろん地上に降る雨水は、地下水かん養や地盤沈下防止、都市河川の水量の維持など、地域の水環境に重要な役割を果たすことも忘れてはならない。



ところで、稲葉紀久雄は、「下水」という言葉について、柳田国男の説をベースに、語源は「ゲスキ」ではないかと考察している。つまり捨てて流し去る排水ではなく、流しの捨て水(ゲス)を溜めおき(キ)、田畑に撒いて有効利用する、という概念を持っていたと推定する<sup>65)</sup>。要するに上水に対する「下水」と漢字に当てはめられたことで意味はまったく変わってしまうというのである。

前述の雨水利用や、使用後の処理水を雑用水に再利用する「中水システム」は、稲葉が言うところのゲスキの現代版であると考えられる。雨水も下水も、不用品として流し捨て去るところから「貯めて活用」に、再度転換することの意味を考えなくてはならないだろう。

かつての人びとは、自然のなかで清浄な水を得るために濁りや砂の混入を見張り、水を運びやすく使いやすくする水の具を考えだしてきた。限られた風呂水は大切に使い、排水は溜めておく。自然の循環系を損なわないよう処理する体系も存在した。水への対応は細やかなものであり、少ない水を大切に使う暮らしのなかで水への感性が培われたのであろう。翻って今日、水は流入・流出へと形態変化し、わたしたちの目の前に滞留する機会や期間が減少あるいは消滅したことで、水との関わり方が希薄になってしまったことは否めない。水の使い方、排水の仕方が再認識されるべきだろう。享受する今の利便性・快適性を手放すことはとても難しいが、環境からのシグナルを受け止める感性を持つために、かつての暮らし方を振り返ってみることは十分価値があると思われる。水まわりは人びとの生活を支えるとともに、その時代の文化や技術や思想に支えられていくものであるから、時代とともに変容し、今後も変容し続けていく。

#### 参考文献

- 李家正文『水の生活史』雪華社、1963
- 嘉田由紀子『生活世界の環境学』農文協、1995
- 堀越正雄『水道の文化史』鹿島出版会、1981
- GK研究所・山口昌伴『図説 台所道具の歴史』柴田書店、1978
- 高橋昭子・馬場昌子『物語ものの建築史・台所のはなし』鹿島出版会、1986
- 日本生活学会『台所の100年』ドメス出版、1999
- 江夏弘『お風呂考現学』TOTO出版、1997
- 落合茂『洗う風俗史』未来社、1984
- 楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版、1981
- 榮森康治郎『水と暮らしの文化史』TOTO出版、1994
- KBI出版『水(水の生活文化史 水の博物館)』KBI出版、1994
- 光藤俊夫・中山繁信『すまいの火と水』彰国社、1984
- 拙稿『暖房の生活史』和歌山大学教育学部紀要(教育科学)第48集、1998、PP107-120
- 日本風俗史学会『日本風俗史事典』弘文堂、1994
- 前掲書10)、P12
- 日本民俗建築学会『図説 民俗建築大事典』柏書房、2001、PP192-193
- 前掲書16)、P191
- 前掲書10)、PP76-80
- 江戸東京たてもの園『江戸東京たてもの園物語』スタジオジブリ、1995、P173
- <http://www8.cao.go.jp/survey/h13/h13-mizu/>
- 前掲書10)、PP99-100
- 前掲書11)、PP25-29
- 前掲書10)、P133
- 前掲書11)、P16
- 暮らしの手帖社「デスクキッチン」『暮らしの手帖』33号、PP5-24等にその事例がみられる。
- 前掲書4)、P136
- 古島敏雄『台所道具の近代史』有斐閣、1996、P68
- 前掲書27)、P67
- 『暮らしの手帖』42号、1957、P118
- 前掲書4)、P154
- 『暮らしの手帖』48号、1959、P124
- 前掲書16)、P358
- <http://www.j-economic.co.jp/040826-jyousuiki.htm>
- 前掲書7)、P17
- 前掲書8)、PP20-22
- <http://www.1010.or.jp/data/sentousu.html>
- 前掲書16)、P200
- 前掲書7)、P100
- 前掲書10)、P167
- 前掲書7)、P125
- 拙稿『暮らしの手帖』にみる高度経済成長期の住生活』和歌山大学教育学部紀要(教育科学)第53集、2003、P160
- 前掲書10)、P169
- 前掲書14)、P368
- 前掲書8)、P17
- 前掲書8)、P29
- 前掲書8)、P206
- 前掲書41)、P153
- 日本水環境学会『改訂Q&A 水環境と洗剤』ぎょうせい、2000、P23-25
- 前掲書8)、P216
- 前掲書8)、PP223-227
- ライオン株式会社HP『水環境のサイエンス』
- 前掲書48)、P5
- 前掲書14)、P205
- 前掲書9)、PP103-109
- 前掲書9)、P158
- <http://www.town.koya.wakayama.jp>
- 前掲書10)、P182
- 前掲書9)、P105
- 前掲書10)、P190
- <http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/31/3117/08qora>
- 清水栄里「水と暮らし—風呂の残り湯の再利用について—」和歌山大学卒業研究論文、1994
- 中臣昌広『「水」の安心生活術』集英社新書、2004、PP186-192
- <http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/04-casefile/no4-10html>
- グループ・レインドロップス『やってみよう雨水利用』北斗出版、1994、PP174-177
- 下水文化研究会『下水文化研究』第2号、1988、PP109-112